

**農林害虫防除研究会** Agricultural Insect Pest Management Society of Japan

## *News Letter No.37*

Newsletter of The Agricultural Insect Pest Management Society of Japan No.37

2016年7月15日

研究会所在地：国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構  
果樹研究所リンゴ研究拠点 虫害ユニット  
〒020-0123 岩手県盛岡市下厨川字鍋屋敷92-24  
ホームページ : <http://www.agroipm.org>

### 巻頭言

#### 作物栽培現場の農業生産者への貢献を！

山本敦司

(日本曹達株式会社 小田原研究所)

本年 2016 年 4 月から農林害虫防除研究会（以下、本研究会）の会長を務めさせていただくことになりました山本敦司です。皆様、どうぞ宜しくお願いいたします。

本年 3 月 11 日には、東日本大震災とそれに起因する福島第一原子力発電所の事故発生から 5 年が経過しました。それ以降も自然災害は頻発しており、本年 4 月 14 日には熊本地震も発生しました。巻頭言にあたり、まず、自然災害・事故の犠牲者と被災者の方々に深い哀惜の念と追悼の意を表します。また、農業復興に関しては、熊本地震ではこれからの優先課題ですし、東日本大震災では 5 年経過した現在でも未だ約 50%止まりとの報道です。震災を含む自然の猛威は、食糧とエネルギーの重要性を再認識させるとともに、復興だけでなく防災対策をあらかじめ考慮した農業生産の体質改善をも強く意識させます。

一方、本研究会の考え方に関連するだろう（？）喜ばしい 2 つの話題を紹介します。まず技術的課題として、2015 年ノーベル生理学・医学賞で、抗寄生虫薬イベルメクチン剤の開発研究が受賞したことです。この殺虫剤の使用でより多くの人命を救うことができ、殺虫剤の探索研究が社会に貢献できることが認知されました。同様に、農林業分野でも殺虫剤開発の大切さを感じます。本研究会では、殺虫剤の適切な使用とその普及を IPM の一環として継続して考えていこうと思います。

もう一つは概念的課題です。ベストセラー本「嫌われる勇気（岸見・古賀）」でアドラー心理学が注目されました。アルフレッド・アドラーが伝えたかったことの一つは、「人間の価値に上下はなく、全ての人間が対等の横の関係にあり、上司・部下や性別等に関わりない」ことです。本研究会が目指したい農業生産者への貢献やその方法を明確に指摘されたようで身が引き締まりました。

た。

さて、本研究会が1995年に発足し早21年が経過しました。名誉会員には設立時の先生方のお名前を拝見するようになり、また役員と常任幹事・地方幹事をみても世代交代が進んだことを感じます。会員には若手の方々が入会され、ますます本研究会が持続的に発展すること期待します。本研究会の設立経緯とその役割は、ニュースレターNo.35(2015年7月)の巻頭言で西東常任幹事が極めて分り易くご解説されています。その中で、本研究会として維持・継続すべきことと、変わるべくして変わるものを未来に向けて考えて欲しいとの建設的な提言をされました。

本研究会の設立時の目的・理念は、一言で簡潔に表現すれば“現場への貢献”です。農業生産者が儲かり生産意欲を掻き立てるような、あらゆる防除技術の開発・普及を持続的に目指します。そのためには、上記のA.アドラーが伝えたかったことを心に留めたいと思います。即ち、「研究者から農業生産者まで、人々の対等の心の横の信頼関係」を基軸に、「防除技術と情報の縦の連携フロー」を強くしましょう。その一例として、昨年の大分大会では、農業生産者に近い大分県の普及関係者が多数ご参加され、縦の連携の一つの道筋を感じました。研究者から農業現場をよく知る普及関係者・防除資材の営業関係者までが一堂に会して全国レベルで情報交換を行うことが本研究会大会の手法なのです。

また、本研究会のもう一つの事業にニュースレターの発行があります。その編集ポリシーは、“現場から基礎までのあらゆる井戸端情報が飛び交う舞台”の提供です。学術雑誌とは異なる視点で、技術的にも情緒的にも印象に残る名文を楽しめます。ニュースレターの投稿内容分析に関しては、ニュースレターNo.34(2015年1月)の巻頭言で当時の西松編集担当が分り易くご解説されています。このニュースレターは、上記提案の“横の信頼関係と縦の連携フロー”を具体化する場でもありますので、会員の皆様は西松さんの解説をご参考に積極的で気楽な投稿をお願いします。

さらに本年の新事業として、本研究会情報の海外発信を開始いたします。まず、本ニュースレターNo.37の投稿タイトルと山梨大会の講演タイトルは、それぞれ執筆者と講演者による英訳の付記にご協力いただければ幸甚です。また、過去のニュースレターと大会講演要旨タイトルに関しても、順次英訳を試みる計画です。

次に、技術的な取組みを2点、薬剤抵抗性対策と新規防除技術の開発普及を提案します。薬剤抵抗性管理研究は、有効な殺虫剤を持続的に確保する点で農業生産現場に貢献できます。農水省の委託プロジェクト研究「ゲノム情報等を活用した薬剤抵抗性管理技術の開発」が産官学の連携で現在進行中であり、その成果の現場への還元が楽しみです。2つ目の提案、新規防除技術のアイデアも議論しましょう。例えば、次世代の生物的防除技術提案も歓迎です。エンドファイトや

植物共生菌などの微生物の現実的な利用技術などなど……。また、内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム (SIP) の課題「アグリイノベーション創出」での革新的農業技術の成果も期待します。

本研究会では、この薬剤抵抗性管理技術や革新的農業技術を“現場目線”で議論し評価して欲しいと考えます。即ち、「その技術の受け皿があるか？ 使い易さはどうか？ 作物栽培現場へ貢献できるか？」という点に留意し、使える次世代技術として発展させていきましょう！

農水省の本年 2016 年 2 月の報告で、日本の農林水産物・食品の輸出額が 3 年連続で過去最高を更新し、昨年 2015 年は 7,452 億円となりました。日本の農林水産物や食文化がグローバルに高評価を得ることは喜ばしいことです。しかし残念ながら、その一番の功労者である農業生産者の手取りは増加しておらず、課題を残しているとも報告されました。本研究会では、品質のよい農作物を作る農業生産者を技術的側面から強く支援したいと考えます。なぜなら、本研究会の目指すところは、農業生産者が持続的に儲かるために、害虫防除の点であらゆる技術開発・普及を継続的に実施することですから。

(2016 年 6 月 20 日受領)

"Preface: Every effort to contribute to the farmer and the crop quality in the cultivation field "

Atsushi Yamamoto, Nippon Soda Co.,Ltd. Odawara Research Center

(Received: 20 Jun. 2016)

## ニュース

### 虫害担当となって

吉田昂樹

(福島県農業総合センター果樹研究所)

皆さま初めまして。平成 28 年度より虫害担当として福島県農業総合センター果樹研究所病害虫科に配属となりました吉田昂樹（よしだこうき）と申します。星の後任に当たりますのでどうぞよろしく申し上げます。

この度は皆さまへの挨拶をかねて私個人の紹介などさせていただければと思います。

私は物心がついた頃には虫の捕食行動に興味があり、カブトムシやクワガタが当然のようにちやほやされる中、カマキリやクモを好んで採集・飼育していた記憶があります。親に言わせれば「お前が小さい頃、お昼にアリの巣をいじっていて暗くなっても戻らないから探しに行ったら、まだアリの巣をいじっていた。」ということが頻繁にあったとのこと。もちろん、アリの巣の周囲

に様々な虫を配置してそれぞれの攻撃行動や防御行動を観察していたのは言うまでもありません。

やがて、捕食者の行動習性を観察していると「捕食者を利用して害虫を防除できないか？」と考えるようになりました。その一方で、当時小学生だった私は「農薬があるし、虫なんか利用してもコントロールしにくいだけで、農作物の防除に応用するのは無理だろう」とも思っていました。

その後の学生生活の中では虫のことなど忘れていき、大学では土壌放線菌を扱っていましたが、大学院への進学の際に天敵の利用が学問として成り立っている事を知り、大学院で寄生蜂や昆虫ウイルス等を扱ったことからこの業界に足を突っ込むこととなりました。試験研究は本年度からということでまだ実績はゼロですが、今後皆さまのように植物防疫の看板を背負っていきけるよう尽力したいと考えております。

最後に、このニュースレターですが、過去の記事を拝見しましたところ、論文に出てこない細かいハンドリングの話や、雑多な面白い知識など、ここでしか得ることの出来ない情報が多々あるように思いました。非常に貴重な情報誌として今後も楽しみにしているとともに、そういった情報を自分から出せるように頑張っていきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

(2016年6月3日受領)

"Ambition for my new work"

Kouki Yoshida, Fukushima Agricultural Technology Centre, Fruit Tree Research Centre

(Received: 23 May 2016)

## りんごの共同防除とハダニ

布山佳浩

(長野県南信農業試験場)

昨年4月より、南信農業試験場で果樹の害虫を担当する事になりました。今回は、普及員の頃から係わっているりんごの共同防除園におけるハダニの防除対策についてお話ししたいと思います。

平成24年に、当時担当していた地区の防除組合(組合員数23戸、共同防除面積約25ha)から、ハダニが多発して困っているとの相談を受けました。現地ではすぐに「殺ダニ剤が効かなくなった!」となりがちなので、組合役員、技術員、試験場と一緒に実態調査に乗り出しました。殺ダニ剤の感受性低下やスピードスプレーヤの散布ムラ、下草管理の違いなど、様々な要因が考えられる中、まずはハダニ類の防除時期が適当であるかどうかを検証するため、発消長調査と農家の防除に対する意識調査から始めました。発消長の調査結果を組合員に判りやすく伝達す

るため、地区中央部にある防除機材庫にホワイトボードを設置し、4色のマグネットシート（無・少・中・多→青・緑・黄・赤）で地区内3地点の発生状況を掲示しました。意識調査では、共同防除ならではの問題点（防除要否の判断が役員任せ、個々のほ場の発生状況に応じて薬剤を加減しにくい、など）も見えてきました。また、一部の殺ダニ剤で感受性の低下が確認された一方で、感受性の高い薬剤の散布後も高い防除効果が得られていない事例も認められ、今回の取り組みが、薬剤の散布技術や圃場の管理方法を見直すきっかけとなりました。

防除組合の農家さんと一緒に調査やハダニに関する学習会を重ねるうちに、変化が現れてきました。農家自らがルーペを手に、定期的に園内のハダニの発生状況を観察し、「ハダニはいるけれど局所的だし、カブリダニがけっこういるから大丈夫だろう」との声も聞こえる様になりました。

これまでの結果から、比較的樹齢の若いわい化栽培園でハダニの発生量が多い傾向があるため、本年はわい化栽培園のほ場環境とハダニの発生量の関係について調査をしています。また、新しい試みとして、組合員が育苗したインゲン苗を各戸に配布し、園内に定植して定期的に観察するようにしています。これは、各自がハダニの発生状況に興味を持ち、園内を観察する様になって欲しいとの願いからの取り組みですが、果たして上手くいくかどうか・・・

まだまだ道のりは長そうですが、少しでもハダニ多発の要因を明らかにしていければと思っています。

(2016年6月20日受領)

"Cooperative control of spider mites in apple"

Yoshihiro Fuyama, Nagano Nanshin Agricultural Experiment Station

(Received: 20 Jun. 2016)

## 「赤ちょうちんと温故知新」

大矢武志

(神奈川県農業技術センター生産環境部病害虫研究課)

赤色防虫ネットを発表したとき、「どうして思いついたの？」との質問を何度か受けたが、そのときは近い方々には冗談で『赤ちょうちん』を眺めている時に思いついた・・・と答えていた。真実は、子供の頃大好きだった昆虫図鑑に「夜、カブトムシを採りに行くとき、赤いセロファンで懐中電灯を覆うと、『赤い光』はカブトムシに『見えない』から逃げ出さない」と記載してあったのを記憶していたからである。ちなみに大人になって息子と一緒にいったカブトムシ採りの際、初めて「赤いセロファン懐中電灯」を試したが、クワガタは逃げ出していたのを記憶している。

さて、前出の「赤ちょうちん」であるが、この拙文を読んでいる貴兄方の多くがこの「ライト

トラップ」に引っかかっている姿を容易に想像できている。でも、「赤ちょうちん」は何故「赤」なのだろう。インターネットで調べてみると「赤い色は光の波長が長く、遠くからでも見つかる」とか「赤色は人間の副交感神経を刺激し、食欲を増進させる」とかの記載がある。でも、私は別の仮説を立てている。

かつて、何気なくNHK「ブラタモリ」を見ていたら、「赤ちょうちん」が出現したのは江戸中期以降、どうやら「吉原」が出現の地との説明が耳に入ってきた。「吉原」と聞いただけで「ニヤッ」として、「フェロモントラップ」にすぐに引っかかる貴兄方の顔が思い浮かぶが、そこは無視して話をすすめていく。「吉原」は江戸初期では人形町（東京都中央区日本橋人形町）あたり、中期以降は浅草寺近く（台東区日本堤）あたりにあった遊郭であるが、その時代で言えば「江戸からの僻地」である。「火事と喧嘩は江戸の華」と言われるほど、江戸は火事が頻繁に発生した。江戸中期以降の「新吉原」は夜間の営業も許可され、火事を恐れた江戸幕府は江戸の街から離れた僻地に配置したと解説していた。画面にも「赤い」提灯（ちょうちん）がならんで煌々と明るい吉原の夜が映し出されていた。そのとき、時代劇でよく出るシーン、辻斬りに切られた町人の持っていた提灯が燃え上がる様子を思い浮かべていた。江戸の郊外は夏の夜になるとチョウ目やら甲虫やらがウヨウヨ飛び回る、「飛んで火にいる夏の虫」どころの騒ぎではない。そこで、人が「何げに昔から知っていた」虫が見えない「赤色」に提灯を染めたのではないかと。

この「赤ちょうちん」仮説について、せっかくなので江戸時代に詳しい神奈川県立歴史博物館の重鎮学芸員 A 氏に尋ねてみた。その結果は、「残念ながら、そのような記載はこれまでありません・・・」とのこと。でも、「赤は古代から『魔を滅する色』として珍重されています。古代において『魔』とは病気、その中でも蚊などが媒介する感染症だと考えられています。前世紀に見られた『未開の地』の住人達が泥や染色液で体を赤く染めることは、出土する土偶からもわかるように古代日本人も行っていたようです。それは蚊などの『虫除け』だったことは十分に考えられます。古代から人間は赤色を虫が認識できないことを知っていたのかもしれませんが。ちなみに『口紅』は『魔』が口から入らないようにするための『名残』、赤飯を食べるのは『魔を滅する色』を体に入れるための儀式、紅白幕も源平合戦の旗さし物との説もありますが、白米と『魔を滅する色』の組み合わせとの説もあります。」とのことであり、最後に「『赤ちょうちん』仮説、ホントかもしれませんね。」とのお言葉をいただいた。

これまた時代劇を見ていると、お殿様が紫の鉢巻きをしている姿が出てくる。これは病鉢巻（やまいはちまき）と呼ばれているようで、その「江戸紫」を染めている紫根草の根には解熱、涼血解毒の生薬成分が含まれているとインターネットには書かれていたが。「赤ちょうちん」で「ちょうちん」みたいに赤い顔してネクタイを「鉢巻き」にして「頭を冷やしている」貴兄方の姿を眺めながら、これからも日常に埋もれている「何か」を見つけて防除に役立てたいなどと考える日々は続いている。

(2016年6月27日受領)

"On the Origin of the Red Insect-Proof Net"

Takeshi Ohya, Kanagawa Inst. Agri. Sci.

(Received: 27 Jun. 2016)

## とりあえずローテーション防除の完遂でいかがでしょうか

杉井信次

(シンジェンタ ジャパン(株))

薬剤抵抗性管理の活発な議論が繰り返されています。一方、農業生産現場ではローテーション防除が推奨されています。更にローテーション防除を徹底したい思いから、先の応動昆虫学会懇親会で、メーカー有志で、徳丸さんをキャベツ、國本さんをコナガにした寸劇もしました。

さて、日本ではジアミド系抵抗性コナガが蔓延しています。一方、オーストラリア(豪州)では、日本と同時期に生産現場に導入され、今も基幹剤として推奨されています。弊社の G4946E 変異を指標とした PCR 検定結果は、日本では R 遺伝子が蔓延していますが、豪州では低密度のままです。安易に比較するのは乱暴ですが、背景に明確な違いがあります。それは、ジアミド剤導入前から豪州ではローテーション防除が生産現場に定着し、農薬製品への作用機作分類番号の記載も義務化されています。

将来を見据え、日本もとりあえずローテーション防除の徹底は図るべきではないでしょうか。

(2016年5月23日受領)

"Let's do perfect rotational application first of all"

Shinji Sugii, Syngenta Japan K.K. (Received: 23 May 2016)

## 一律基準値では農薬散布はできなくなる？

畑中 猛

(山口県農林総合技術センター)

昨年、山口県では残留農薬基準値超過が3件確認されました。

10月にJAの直売所のハウレンソウからエトフェンプロックス(殺虫剤トレボン)0.05ppmが検出(基準値0.01ppm)され、11月に同じJAの直売所のコマツナからエトフェンプロックス(殺虫剤トレボン)0.10ppmが検出(基準値0.01ppm)され、12月に別のJAの直売所のシュンギクからエトプロカルブ(除草剤バンバンの成分)0.03ppmが検出(基準値0.01ppm)されました。

県の記者発表では、ADI(1日摂取許容量)から今回の検出値は「体重50kgの人が、ハウレ

ンソウでは 31.0k g, コマツナでは 15.5k g, シュンギクでは 16k gを, 毎日, 食べ続けても健康に影響はありません」と説明しています。

ところで, 農林水産省のある室長さんが, 「科学的データに基づき, 農産物の安全性の確保を図っていく」と言われていました。そこで, ADI (1日摂取許容量) を利用した基準値設定を提案しましたが, 「ネガティブなデータはとれない」と言われました。本当にネガティブなデータでしょうか。上記の例のように一律基準と安全性はリンクしていません。農薬について, ADI を利用した基準値設定, または, 野菜類等の多くの作物に適用のある農薬登録への取り組みが重要と考えます。

コマツナとホウレンソウは, 昨年, 暫定基準値 (2ppm) から一律基準値 (0.01ppm) に引き下げられたものです。周知期間はあるものの, 基準が 200 分の 1 になるのはいかがでしょうか。近年, 直売所向けの少量多品目栽培が増加しています。対策として, 複数の野菜に適用のある農薬を使用するように指導しています。シュンギクについては, 50~100m離れたムギほ場からのドリフトが疑われています。このドリフトの問題も気がかりです。

残留農薬基準値超過の対応として, 「基準超過の事例を収集し, 基準値超過のあった農薬について, 使用させないようにしろ」という意見が複数ありました。基準値変更のため, 適正残留農薬基準値超過件数は増加することが予想され, 今後, これが複数意見から多数意見になるかもしれません。農薬の安全使用に向けた新たなしくみづくりについて, 関係機関が連携して取り組むことを期待します。

(2016年6月10日受領)

"Outcome of the Uniform Limit: 0.01 ppm -Can we use pesticides?-"

Takeshi Hatanaka, Yamaguchi Prefectural Agriculture & Forestry General Technology Center

(Received: 10 Jun. 2016)

## モンズーン入門

森下 正彦(和歌山県海南市)  
井上 誠(秋田県立大学生物資源科学部)

### 1. はじめに

チャバネアオカメムシなど果樹カメムシ類は, スギとヒノキの球果を餌として増殖するため, それらの球果量が多いと果樹カメムシ類の発生量が増加する。しかし, 球果量を定量的に計測することが難しいので, 病院等が観測している花粉飛散数を代用して, 果樹カメムシ類の発生量が予測できた(森下ら, 2001)。そして, スギ・ヒノキの花粉飛散数には花芽分化期である前年夏の気象が影響して, 前年夏(6~8月)の降水量が多いと少なく, 降水量が少ないと逆に多い傾向



を示す (佐橋, 1995)。

果樹カメムシ類の被害予測に携わっていた 2000 年前後は、西日本の夏の降水量は前年に比べて翌年が増減する変動を繰り返す、その変動から花粉飛散数やカメムシ発生量の変動をうまく説明できていた。降水量が約 1 年ごとに増減を繰り返す「2 年周期」に興味を持って調べていくと、その背景にはモンスーンが深く関わっていることがわかり、素人なりに文献を参考にして「モンスーン」に触れた (本誌 16 号:森下, 2006)。しかし、やはり不安感はぬぐえず、今回専門家である井上誠さんに原稿をみていただき正確に情報を提供したいと考えた。

なぜ、モンスーンに関連した夏期降水量の 2 年周期をお伝えしたいかという、スギ・ヒノキの球果生産以外にも、夏の降雨は水稻いもち病や秋野菜 (キャベツ・ハクサイ) のヨトウムシ類など病害虫の発生への影響が大きいため、農業の病害虫防除関係者には、単に気象長期予報を参考にするだけでなく、気象の変動メカニズムを知っておくことが有益と考えるからである。

## 2. モンスーンとは

モンスーンとはアラビア語で「季節」を意味し、アラブの航海士はアラビア海上における季節的な風向きの変化を「モンスーン」と呼び、インドの農家にとっては毎年 6 月から始まる雨季を意味した。気象学的には、モンスーンは大陸と海洋の熱的性質 (暖まりやすさ) の違いによって卓越する風向が夏と冬で交代する現象であり、風向変更に伴い降水量の分布域も季節的に変わる (井上, 2010)。モンスーンは西アフリカや中米の一部でも認められるが、最も顕著なものはアジア域の東部とインド、東南アジア付近でみられる「アジアモンスーン」である。人口が集中しているアジア域において洪水や渇水は深刻な問題であり、アジアモンスーンの変動を予測して防災・減災につなげることが喫緊の課題となっている。しかし、我々害虫防除関係者にとっては、モンスーンそのものよりも、それに関連した「降水量の周期性」が害虫発生に影響する重要な情報になる。

## 3. 日本付近における降水量の変化

モンスーンが強い年は、フィリピンとインドを中心とする地域で多雨となり、逆に日本付近では降水量が減少する傾向がある (Inoue and Takahashi, 2009; 井上, 2010)。日本付近に限ると、モンスーンの強い年は太平洋高気圧が強まり、6~8 月の降水量が減少し、モンスーンの弱い年には太平洋高気圧の張り出しが弱く、降水量が多い傾向がある。日本付近といっても、北緯 28 度付近 (沖縄) では 5~6 年周期 (モンスーンとは別の要因) が卓越するが、北緯 35 度付近 (西日本) では 2~3 年の周期が顕著であり、1989~2004 年には 2 年周期で変動した (富田, 2004)。実際、その期間は和歌山県でも 2 年周期を示した (図 1)。

2 年周期変動のメカニズムとしては以下のような説が提唱されている。モンスーンが強い年に

は、南アジアの上空で大気の循環が強くなるために、寒気が南下しやすい条件となり、寒気移流は翌春まで持続する傾向になる。これに伴い大陸-海洋間の温度差が小さくなるために、モンスーンが強い年の翌年はモンスーンが弱められる。モンスーンが弱い年の翌年には逆のメカニズムでモンスーンが強められる (Ogasawara et al., 1999)。

以上のような対流圏での変動は、対流圏 2 年振動 (TBO: Tropospheric Biennial Oscillation) と名づけられているが (Meehl, 1987), これとは別に、これまで赤道上空の下部成層圏には平均して 28 ヶ月の周期で東風と西風が交代する熱帯成層圏準 2 年周期振動 (QBO: Quasi-Biennial Oscillation) が知られていた。成層圏 QBO が対流圏の気象と密接に関係することが指摘されているが (井上, 2010), その詳細については不明な点が多く、現在も研究が進行中である。

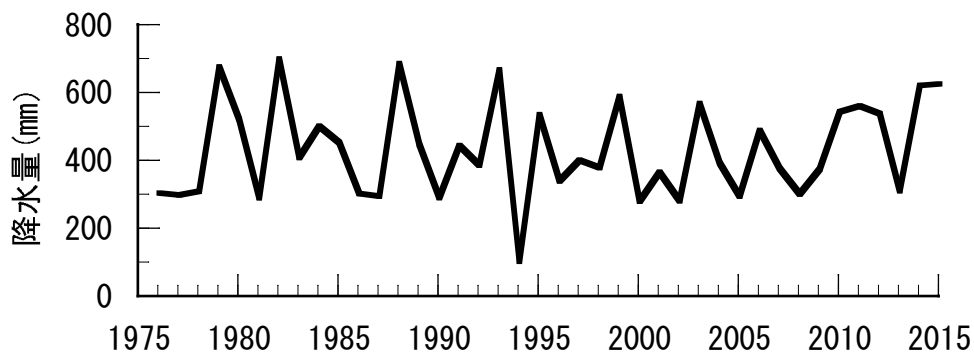


図1 和歌山市の夏期 (6~8月) 降水量の年次変動  
1989~2004年には2年周期の増減が認められる。

#### 4. モンスーンの現況を知るには

モンスーンの強さを示す指標はこれまでに十数種類以上提案されているが (川村, 2003), 夏のアジアモンスーンを1つの指標で表すのは困難である。しかし、今年の夏の降水量を予想するためにもモンスーンの強さについて現在の状況を知っておきたいところである。インターネットで比較的手軽に入手できるモンスーンの指標としては、インド気象局による「インドの降水量」がある。例えば、NOAAの気候インデックスのウェブページ <http://www.esrl.noaa.gov/psd/data/climateindices/list/#India> の「Central Indian Precipitation (core monsoon region)」にはインドの月別降水量データが数値で表示されている (1948-1999年)。また隣の Indian Institute of Tropical Meteorology 内の Monsoon on-line には最近のインドの降水量が表示されており、モンスーンの現況を知るのに大変便利である。インドで降水量が多いときはアジアモンスーンが強く、降水量が少ないときにはモンスーンが弱い年に概ね対応する。

## 5. おわりに

降水量の2年周期が顕著であった1989～2004年以降、実は降水量の2年周期は不明瞭になっている(図1)。しかしながら、驚いたことに和歌山県ではスギの花粉飛散数からみると隔年結果は続いているし(図2)、それに対応して果樹カメムシ類の発生量、例えばチャバネアオカメムシの越冬密度では2年周期の増減は続いている。前年夏の降水量とスギ・ヒノキ花粉飛散数の関係を長期データからプロットすると、極端に降水量が多い年や少ない年の影響が大きいため両者の相関は得られるが、中間的な年には花粉飛散数のばらつきが大きい。これは、花粉飛散数(球果量)は気象の影響を受けながらも、球果の豊凶それ自体によって内因的にも変動することを示唆しており、それはそれで興味深い。しかし、今回焦点を当てたモンスーンの周期変動については、今後の研究の進展によって、スギ・ヒノキの花粉飛散数(球果量)の予測、ひいては果樹カメムシ類の発生量予測につながることを期待される。

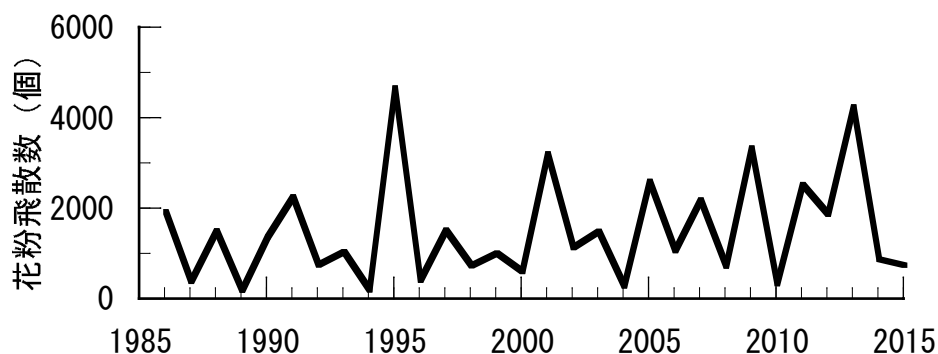


図2 和歌山県におけるスギ花粉飛散数の年次変動(3地点平均)

## 6. 引用文献

- Inoue, M. and Takahashi, M. (2009) *J. Meteor. Soc. Japan* 87(1):119-138.
- 井上誠 (2010) アジアモンスーン域における成層圏対流圏結合 東京大学博士論文 125pp.  
(ネットで閲覧可能)
- 川村隆一(編)(2003)モンスーン研究の最前線 気象研究ノート 204号 日本気象学会 222pp.
- Meehl, G. A. (1987) *Monthly Weather Review* 115:27-50.
- 森下正彦ら (2001) 応動昆 45:143-148.
- 森下正彦 (2006) 農林害虫防除研究会 News Letter 16:5-6.
- Ogasawara, N. et al. (1999) *J. Meteor. Soc. Japan* 77(6):1247-1270.
- 佐橋紀男ら (1995) スギ花粉のすべて メディカル・ジャーナル社 117pp.
- 富田智彦 (2004) *Blue Earth* 11/12:30-33.

(2016年6月23日受領)

"An Introduction to Monsoon"

Masahiko Morishita, Kainan, Wakayama Pref.

Makoto Inoue, Akita Prefectural University

(Received: 23 Jun. 2016)

## 石川県での斑点米カメムシ類の発生状況と最近の取組み

植松 繁

(石川県農林総合研究センター農業試験場)

石川県は、水田面積率が8割を超える水田地帯であり、移植は4月下旬頃から5月末まで続く。栽培期間の初期・中期・後期で様々な害虫が問題となるが、近年最も重要なものはやはり斑点米カメムシ類である。本県での斑点米カメムシ類の発生は、ここ数年多発状況にある(図)。発生種は、カスミカメムシ類が占める割合が高く、特にアカスジカスミカメの発生量が急速に増加している。一方で、以前から問題となっているシラホシカメムシ類やホソハリカメムシなどの発生が見られなくなったわけではなく、圃場周辺雑草や本田内で一定量確認されている。また、クモヘリカメムシは、かつては県内の一部地域でのみ発生していたが現在では全県的に発生が見られ、特に山間地での発生が多い。このように、種構成や分布、発生量が年々変化している明確な要因について言及することは難しいが、気象条件や圃場周辺の植生、環境条件の変化などが関与していると考えられる。

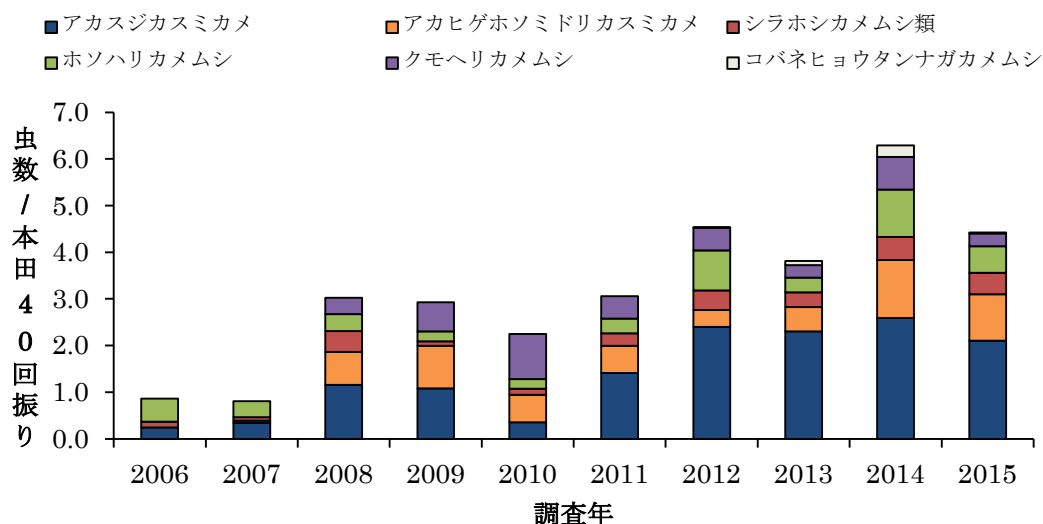


図 石川県における斑点米カメムシ類の発生状況(2006～2015年)

※石川県病害虫防除室の調査結果。

7月下旬の本田40回振りすくい取り調査の県内13地点における平均値。

こうした現状の中で、石川県では現在、景観生態学的な観点に基づいた斑点米カメムシ類の発生リスクマップの作成を行っている。これは、圃場周辺植生等から当該地域の発生程度を推定し、防除判断に活用しようというものである。実際のマップ作成に当たっては、GIS（地理情報システム）や統計モデルなどの利用に悪戦苦闘な毎日であるが、試行錯誤しながらも生産現場に根付いた試験研究を展開し、いつの日か成果を本研究会で発表できればと考えている。

(2016年6月12日受領)

"Up-to-Date Researches on Occurrence of the Rice Bugs in Ishikawa Prefecture"  
Shigeru Uematsu, Ishikawa Agriculture and Forestry Research Center Agricultural  
Experiment Station (Received: 12 Jun. 2016)

### 日本のアブラムシ-アリ共生系に新メンバー: モンクチビルテントウ

金子修治  
(大阪府立環境農林水産総合研究所)

私は平成28年4月から大阪環農水研で害虫担当として勤務しております。3月までは静岡県職員として農林技術研究所果樹研究センター等に勤めておりました。これから新たな地で頑張っていきますので、引き続き宜しくお願いいたします。

さて、私のライフワークである「アブラムシ-アリ共生系とそれを利用する天敵昆虫」にも、最近新たなメンバーが加わりました。その名は「モンクチビルテントウ」です。成虫は体長約2~3mm、鞘翅の地色は赤みがかかったオレンジ色で、2対の黒い斑紋と、鞘翅接合部に黒い斑紋が1つあります(写真1)。



写真1



写真2

元々の分布地は中国南部, 台湾, ベトナム等ですが, 1989年に沖縄本島にて本国で初めて捕獲されたのち, 2006年に鹿児島県, 2010年には福岡県で発見されています。本州では, 私による2010年の静岡市清水区での記録が最初と考えられます。その後は, 神奈川県や東京都内の各地で頻繁に発見されており, かなりのスピードで分布を拡大しています。

静岡県内では, 2010年以降, 私が勤務した先々(果樹研究センター旧敷地: 静岡市清水区駒越西, 伊豆農業研究センター: 東伊豆町稲取, 静岡県庁: 静岡市葵区駿府城公園)で発生を確認しており, 各地に定着していると思われます。

幼虫は, 楕円形のお皿をひっくり返したような形をしており, 脚は体の下にすっかり隠れています(写真2)。近縁種のヨツボシテントウの幼虫に似ていますが, 中齢以降であれば区別は可能です。私が本種幼虫を発見したのは, 全て, アリ(トビイロケアリ, アミメアリ等)が随伴するアブラムシ(ユキヤナギアブラムシ, ミカンクロアブラムシ等)のコロニー内です。観察したところ, 幼虫はアリと出会った場合, あるいはアブラムシを捕食中でも, アリには全く攻撃されませんでした。おそらく, 低い姿勢と緩慢な動き, さらに化学擬態によってアリによる感知を免れていると思われます。

アリが随伴するアブラムシコロニー付近では, 本種成虫も確認されました。観察の結果, 成虫は非常に素早く走ることがわかりました。そのスピードは私が見たことがあるテントウムシ類の中では最速で, アリが捕まえることは, まず不可能と思われました。

このように, 本種はアブラムシ随伴アリに対して高度に適応していると思われました。その適応は, 本来の分布地において, アリが随伴するアブラムシコロニーを利用する進化的過程で獲得されたものと考えられます。そんな種が日本国内に侵入し, 各地の「アブラムシ-アリ共生系」に入り込みながら, 定着・分布拡大を行っているものと推測されます。

私の新たな勤務地である大阪環農水研の敷地内(羽曳野市)では, 昼休みに本種を探していますが, まだ見つけることができていません。大阪府では2015年に淀川付近で発見されており, 府南部に位置する当市でも分布の可能性は十分あります。私のライフワークに新たな展開を与えてくれる本種に新天地で出会うことを心待ちにしている今日この頃です。

(2016年6月16日受領)

"A new member in aphid-ant mutualistic systems in Japan: *Platynaspidium maculosus*"

Shuji Kaneko, Research Institute of Environment, Agriculture and Fisheries,

Osaka Prefecture

(Received: 16 Jun. 2016)

## 第21回農林害虫防除研究会（山梨大会）のご案内

第21回農林害虫防除研究会・山梨大会については、下記のとおり平成28年9月8～9日に甲府市にて開催いたします。なお、大会の詳細や申込方法などについては、農林害虫防除研究会ホームページ (<http://www.agroipm.org/>) に掲載しておりますので御覧ください。

### <大会の概要>

- (1) 日程：平成28年9月8日（木）13:00～9日（金）12:15
- (2) 会場：ベルクラシック甲府  
山梨県甲府市丸の内1-1-17（JR甲府駅北口より徒歩3分）  
URL <http://www.bellclassic-kofu.com/>
- (3) シンポジウム：テーマ「近年問題となっている果樹の重要害虫」
- (4) 一般講演：20題を予定

### <申込・問合せ先>

#### 山梨大会事務局

山梨県果樹試験場 環境部 病虫害科（担当：國友，内田）

〒405-0043 山梨県山梨市江曾原 1204

電話：0553（22）1921 ファックス：0553（23）3814

大会事務局メールアドレス：nourin2016@pref.yamanashi.lg.jp

（お問い合わせは、なるべくメールにてお願いします。）

## お知らせ

### 第26回天敵利用研究会徳島大会開催のお知らせ

本年度の第26回天敵利用研究会（会長：矢野栄二近畿大学教授）は、徳島市の「阿波観光ホテル」において2日間にわたって開催します。天敵利用研究会はこれまで11～12月に大会を開催してきましたが、より多くの生産者や関係者に参加していただけるよう、今回から8月に開催することになりました。

大会では初日に「現場力を活かした天敵利用」をテーマとしたシンポジウムを開催するとともに、2日目にかけて研究発表を計画しております。シンポジウムでは、天敵利用に精力的に取り組む全国各地の現場指導者（普及指導員、JA営農指導員等）や生産者から、それぞれの地域での最新の取り組みについて紹介していただきます。その後はパネルディスカッションを行い、会場全体を交えて、天敵利用のさらなる発展と普及に向けた今後の課題について、幅広く議論します。振るってご参加下さいますよう、お願い致します。

1. 日時：平成28年8月24日（水）～25日（木）
2. 場所：（大会）阿波観光ホテル  
徳島県徳島市一番町3-16-3 TEL: 088-622-5161  
（情報交換会）阿波観光ホテル
3. 内容：24日午後にシンポジウム，以後25日にかけて一般研究発表
4. 問い合わせ先：  
（大会長） 網田克明（徳島県立農林水産総合技術支援センター）  
（大会事務局）徳島県立農林水産総合技術支援センター 中野昭雄  
〒779-3233 徳島県名西郡石井町石井字石井1660  
TEL: 088-674-1954 FAX: 088-674-3114  
e-mail: nakano\_akio\_1@pref.tokushima.lg.jp（中野昭雄）

## 第46回常任幹事会議事録（概要）

日時：平成27年12月15日（14:30～15:30）

場所：日本植物防疫協会会議室（東京都北区中里）

参加者：本多，柴尾，春山，岸本，諫山，大井田，加進，上遠野，木下，國友，後藤，執行，田中，豊嶋，西森，林，藤岡，宮井，村井，山本，和田，姫野（大分大会事務局），村上（山梨大会事務局），野村（敬称略）

欠席者：西東，中野，根本，望月，八瀬，矢野（敬称略）

1. 開会挨拶（挨拶）本多会長（会議進行）柴尾副会長（議事録）春山副会長

2. 報告

（1）前回第45回常任幹事会の議事録の承認

（2）事務報告

①会員動向・役員・都道府県幹事

平成27年3月31日現在：414名

平成27年度 新規入会 23名

平成27年11月30日現在：437名

名誉会員：（6名）：正野俊夫氏，廿日出正美氏，池田二三高氏，古橋嘉一氏  
宮田 正氏，本山直樹氏

研究会役員，および県幹事（平成26.4.1～平成28.3.31）（省略） 変更なし

②平成27年度事業報告，予算執行状況

・事業報告

常任幹事会（第45，46回），第20回大分県大会&総会，  
ニュースレター（No.35発行，No.36予定）

・予算執行状況（平成27年11月30日現在）



収入 1,739,738 円 支出 268,897 円 残高 1,470,841 円  
次年度繰越金 1,470,841 円 (前年度繰越金 1,049,920 円)

以上、異議なしで承認。

(3) 役員会報告

(4) ニュースレターおよびホームページ関連

1) ニュースレター関連

・ No.35 発行報告

7月31日発行済, 465部。24ページ, 発行経費: 175,112円

・ No.36 編集報告

原稿依頼, 県幹事Dグループ 執筆予定10名, うち4件受領

1月中旬印刷予定, 1月下旬発行予定

2) ホームページ関連

・ 内容随時更新

(5) 第20回農林害虫防除研究会大分大会(平成27年)開催報告

大会事務局姫野氏から報告

○開催報告

7月21日~22日大分市ホルトホール大分で開催。参加者合計195名, シンポジウムテーマ「薬剤抵抗性を考える」, 前回徳島大会アンケート調査の要望が高かったことと植物防疫分野において最も重要性の高い問題であることで取り上げた。本会発足第20回ということで, 農薬メーカーを代表し日本農薬(株) 神山社長, および日植防の宮井技術顧問に基調講演をお願いした。また, 特別講演が各専門分野の5名の演者からなされた。一般講演は2日目のみで17題が講演された。大分大会では県内普及指導員の参加を募り約30名が参加した。

情報交換会は約130名が参加。大分県産品を選定し好評を得た。事務関係は住友化学(株), 日本植物防疫協会, 大分県肥料植物防疫協会から支援頂き, 15名のスタッフで恙なく運営できた。

報告に対し, 普及指導員の参加について地元の方への配慮は何か?と質問あり, 参加費を無料にし若手に声をかけたと事務局。

○大会会計決算

・ 収入の部

研究会助成金 200,000 円, 日植防助成金 200,000 円その他, 大分県肥料植物防疫協会助成金の申し出で講演要旨の印刷代 102,600 円。

参加費会員 94 人, 非会員 47 人の合計 188,000 円, 情報交換会 121 人で 726,000 円, 利息 43 円, 以上合計 1,416,643 円

・ 支出の部

会場 104,580 円, 控室利用料 1,852 円, 備品使用料 53,650 円, 会場ドリンクコーナー飲料など 2,476 円, 情報交換会費(150名分) 928,650 円, 持込飲料費 20,750 円, 地元生産者講師旅費 4,712 円, 講演要旨印刷費 102,600 円, スタッフ宿泊費(3名) 27,600 円, 通信費雑費 37,555 円, 研究会返納 132,218 円

以上合計 1,416,643 円

### 3. 議題

#### (1) 平成 28 年度事業および予算案

##### ①平成 28 年度事業計画

平成 28 年 7 月 ニュースレターNo.37 発行

9 月 第 47 回常任幹事会 (山梨県甲府市) 開催

9 月 第 21 回大会および総会 (山梨県甲府市)

12 月 第 48 回常任幹事会 (東京都) 開催

平成 29 年 1 月 ニュースレターNo.38 発行

##### ②平成 28 年予算案

収入合計 1,903,841 円

(会費 431,000 円, 雑収入 2,000 円, 前年度繰越金 1,470,841 円)

支出合計 1,903,841 円

(ニュースレター関係 400,000 円, 大会関係 200,000 円, 会議費 150,000 円

事務費 100,000 円 (内ウェブ管理費, 通信費等) 予備費 1,053,841 円

支出関係変更点および補足

- ・ニュースレター関係 長文原稿, 写真用に 50,000 円増
- ・ウェブサイト関係 内容充実で 120,000 円増
- ・講演要旨バックナンバー見積もりは次回計上予定

#### (2) 次期役員について

- ・任期平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月

- ・会長：山本敦司 (日本曹達), 副会長：野村昌史 (千葉大学), 柴尾学 (継続)

事務長：岸本英成 (継続)

ニュースレター編集担当：清水健 (千葉県), 藤岡伸祐 (日本農薬)

和田哲夫<HP・NL 英語版作成担当> (アリストライフサイエンス)

情報担当：西野実 (三重県)

会計監査：小澤朗人 (静岡県), 木下正次 (継続)

#### (3) 名誉会員の推挙について

- ・浜村徹三氏が本多会長より推薦された。2/3 以上の賛同により承認。

- ・山梨大会総会で推挙式を行う。準備は岸本事務長が行う。

#### (4) 第 21 回農林害虫防除研究会山梨大会 (平成 28 年) 開催準備状況

- ・大会事務局村上氏より説明

日時：平成 28 年 9 月 8 日 12:00 より受付～9 日 12:30 閉会

場所：甲府市 ベルクラシック甲府

テーマ：「近年問題となっている果樹の重要害虫」

一般講演：1 日目 10 題, 2 日目 14 題の予定

参加費：大会 1,000 円 (会員), 2,000 円 (非会員)

情報交換会：費用 6,000 円 会場：ベルクラシック甲府

- ・展示ブース：実施すると会場費が必要。大会事務局判断で予算化する。

(5) 第22回農林害虫防除研究会大会(平成29年)開催候補地

- ・岸本事務局長より説明
- ・開催県：岩手県  
大会事務局：岩手県農業研究センターが主体となる。
- ・開催時期：9月
- ・日程：初日13:00～翌日12:00まで  
正式に依頼書を既に出し承諾され、4月以降具体的に準備に入る。  
次回常任幹事会に出席依頼する。

(6) その他

- ・役員交代は平成28年4月1日から
- ・常任幹事の選任・交代については3～4月に連絡する。
- ・次回、第47回常任幹事会は山梨大会初日9月8日11:30からを予定。

## 農林害虫防除研究会会則

(名称)

第1条 本会は、農林害虫防除研究会と称する。本会の英語訳を Agricultural Insect Pest Management Society of Japan (略称 AIPM Society of Japan) とする。

(目的及び事業)

第2条 本会は、農林害虫防除に関する国内外の研究と技術に関する情報の交換を行い、会員相互の知識の高揚と親睦を通じて、農林業の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、目的達成のため次の事業を行う。

- (ア) 集会の開催 (イ) ニュースレターの発行 (ウ) 調査研究 (エ) 情報交換
- (オ) その他必要と認められるもの

第4条 本会の所在地は事務長の所属機関とする。

(会員)

第5条 本会の会員は正会員、賛助会員、名誉会員とする。

第6条 正会員は農林害虫防除の専門家及び本会の趣旨に賛同して年会費を納入した個人とする。賛助会員は本会の活動を賛助するため入会した団体、機関、個人とする。名誉会員は本邦農林害虫防除の発展に多大な功績があり、常任幹事会によって推挙された個人とする。

第7条 正会員ならびに賛助会員は別に定める年会費を納入するものとする。会費を2年間滞納したときは退会したものとみなす。

(役員等)

第8条 本会は次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 2名
3. 常任幹事 25名前後
4. 事務長 1名
5. 都道府県幹事 47名
6. 会計監査 2名
7. ニュースレター編集担当 2名
8. 情報担当 1名

第9条 役員の任期は2年とする。ただし、会長は重任することは出来ない。

第10条 会長は本会を代表し、会務を統括、本会の円滑な運営を行う。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその責務を代行する。事務長は本会の庶務、会計を司る。常任幹事は会長、副会長、事務長とともに、常任幹事会を構成し、常時会務の執行に関し審議する。都道府県幹事は当該都道府県の会員の把握とともに、本会会務の連絡に当る。また、会務全般について具申する。会計監査は本会に関わる経理について監査を行い、総会に報告する。ニュースレター編集担当はニュースレターの編集及び発行を司る。情報担当は本会のホームページ、メーリングリストの管理を行う。

第11条 本会役員の選出方法は以下の通りとする。

(ア) 会長、副会長は常任幹事会で選考・承認し、総会で報告する。

(イ) 事務長は会長が指名し、総会で報告する。事務長は補佐を数名任命することができる。

(ウ) 常任幹事、会計監査、ニュースレター編集担当及び情報担当は会長が指名し、総会で報告する。

(エ) 都道府県幹事は会長が指名し、委任する。

第12条 本会は必要に応じ専門委員をおくことができる。

(集会)

第13条 集会は総会、大会、セミナーなどとする。総会は原則として年1回、通常、大会期間中に開催する。大会は原則として毎年6～7月に行う。

(会計)

第14条 本会の経費は会費、寄付金その他によってまかなわれる。大会の会計は別会計とする。

第15条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(付則)

第16条 本会則の変更は総会の議決による。

第17条 1. この会則は平成8年6月22日から施行し、一部改正を平成13年6月28日に行った。

2. この会則の一部改正は平成14年6月28日から実施する。

3. この会則の一部改正に伴い、会計年度を以下の通りとする。

平成14年度は平成14年1月1日から平成15年3月31日、平成15年度は平成15年4月1日から平成16年3月31日、平成16年度以降は同様4月1日から翌年3月31日。

4. この会則の一部改正は平成20年6月26日から実施する。

5. この会則の一部改正は平成25年7月11日から実施する。

6. この会則の一部改正は平成26年7月7日から実施する。

7. この会則の一部改正は平成27年7月21日から実施する。

### 農林害虫防除研究会名誉会員名簿

正野俊夫, 廿日出正美, 池田二三高, 古橋嘉一, 宮田 正, 本山直樹

### 農林害虫防除研究会役員名簿 (2016. 4. 1 - 2018. 3. 31)

会 長：山本敦司

副 会 長：柴尾 学, 野村昌史

常任幹事：伊地知美奈子, 衛藤友紀, 大井田寛, 加進丈二, 上遠野富士夫, 國友義博, 後藤哲雄,  
西東 力, 執行拓宇, 多々良明夫, 豊嶋悟郎, 中野昭雄, 西川洋史, 林 直人, 春山裕史,  
藤岡伸祐, 本多健一郎, 宮井俊一, 村井 保, 望月 淳, 八瀬順也, 矢野祐幸, 和田哲夫

事 務 長：岸本英成

会計監査：木下正次, 小澤朗人

ニュースレター編集担当：清水 健, 藤岡伸祐, 和田哲夫

情報担当：西野 実

太字ゴシック体は, 2016年4月以降に交代した常任幹事

### 農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿

都道府県	氏名	都道府県	氏名	都道府県	氏名
北海道	岩崎暁生	新潟	中野 潔	岡山	佐野敏広
青森	木村勇司	富山	大窪延幸	広島	栗久宏昭
岩手	大友令史	石川	八尾充睦	山口	本田善之
宮城	増田俊雄	福井	高岡誠一	徳島	中野昭雄
秋田	菊池英樹	岐阜	市橋秀幸	香川	三浦 靖
山形	永峯淳一	静岡	松野和夫	愛媛	窪田聖一
福島	荒川昭弘	愛知	三宅律幸	高知	<b>中石一英</b>
茨城	横須賀知之	三重	西野 実	福岡	嶽本弘之
栃木	小山田浩一	滋賀	山本雅則	佐賀	衛藤友紀
群馬	藍澤 亨	京都	徳丸 晋	長崎	寺本 健
埼玉	植竹恒夫	大阪	<b>金子修治</b>	熊本	古家 忠
千葉	河名利幸	兵庫	<b>田中雅也</b>	大分	<b>姫野和洋</b>
東京	<b>飯塚 亮</b>	奈良	井村岳男	宮崎	黒木修一
神奈川	大矢武志	和歌山	貴志 学	鹿児島	井上栄明
山梨	村上芳照	鳥取	大澤貴紀	沖縄	金城邦夫
長野	<b>北林 聡</b>	島根	奈良井祐隆		

太字ゴシック体は, 2016年4月以降に交代した県幹事

## 研究会への入会方法

入会希望者は下記事務局までご連絡ください。入会年度のNews Letterと振替用紙（郵便振替：農林害虫防除研究会 00810-0-82999）をお送りします。年会費は1,000円です。入会フォームが農林害虫防除研究会HP（<http://www.agroipm.org>）からダウンロードできます。

事務局：岸本 英成

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

果樹研究所リンゴ研究拠点 虫害ユニット

〒020-0123 岩手県盛岡市下厨川字鍋屋敷 92-24

TEL 019-645-6157 FAX 019-641-3819 E-mail : kisimoto@affrc.go.jp

## 会費納入のお願い

2016年度会費の納入をお願いします。振り込み用紙を同封しておりますのでご活用下さい。会費は複数年分を同時に納入することが可能です。

2017年度までの会費納入状況については、西暦の下2桁と納入の有無を（ ）内に示してあります。（ ）内の○は納入済年度を、×は未納年度を、－は未加入年度を表しています。年会費は1,000円です。会費納入について不明な点があれば、上記事務局までお問い合わせ下さい。

住所不明でニュースレターが返送されて来る場合があります。人事異動等による所属、住所、送り先が変更となった場合は、事務局までお知らせください。今号の宛名ラベルが、会員名簿に登録されています。

## ニュースレターNo.38の原稿募集

ニュースレターは皆様の投稿で成り立っています。昆虫や防除に関連する文章の投稿をお待ちしています。文字数は400～1,600字程度で書式の規定はありません。カラーの写真や図表も掲載できます。投稿方法は、(1)電子メール、(2)CDやUSBメモリー等のメディア郵送、(3)手書原稿ファックス・郵送、のいずれでも結構です。

ファイル形式は、Windows版の一太郎、MS-Word、RTFテキスト等を歓迎します。また、「各種研究会等の開催案内」も受け付けますので、ご利用下さい。

編集担当：清水 健

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 生産環境研究室

〒294-0014 千葉県館山市山本1762

TEL 0470-22-2963 FAX 0470-22-2604

E-mail : k.shmz31@pref.chiba.lg.jp

## 編集後記

今号から編集担当を仰せつかりました清水と申します。まずは執筆者の皆様、ならびに県幹事の皆様に向けまして、心より感謝申し上げます。御多忙にも関わらず、御投稿頂いた文面に込められた熱量から、当 NL に対するストレートな愛が感じられ、一会員としてとても嬉しく思いました。将来的な執筆者の皆様にも、これからの 2 年間お付き合い頂けますよう、よろしくお願いいたします。

私儀、もはや誰も信じてはくれませんが、生まれつきの恥ずかしがり屋で人前が出るのが苦手な性分ですので、斯様に文をしたためるのは出来れば控えたいと思っておりましたが、前任者からの一本釣りの御指名に逢いまして、僭越ながら編集の大役をお引き受けすることとなった次第です。前任の某氏曰く、「…講演では最低 1 回、会場の笑いを取る…」、「…(彼なら)何か新しいことをやってくれそう…」等々。些か重荷を引き継いだ感はありますが、農林害虫研究分野に限らず新たな芽が育ちにくくなっている昨今の科学分野全般に対しまして、私なりの貢献が出来れば幸いです。

さて、本誌の出来の良し悪しは、ひとえに御執筆下さる皆様の手腕にかかっていると思われます。しかし、どちらの組織も人員削減の苦難にあえいでいる昨今、会員の皆様におかれましては通常業務に必要な時間を確保することすら難しい状況とお察し申し上げます。その中で名文を捻ることには、並々ならぬ苦勞が伴うことでしょう。一部組織の事務方には、「研究者に成果を出させるためには、負荷を掛けるのが一番だ」と安易に思い込まれていらっしゃる向きもあるようですが、編集担当がこのような手口で一方的な熱意を振りかざして原稿を催促し、会員の皆様に苦行を強いる結果となつては NL が楽しくありません。そもそも編集担当の姓からして Shimizu ではなく shiMizu が正しいという噂がございますので、<sup>あ</sup>労働の搾取は苦手中の苦手です。そこで、皆様がついつい投稿（または話題提供）したくなくなってしまうような、私らしいお願いの方法は無いものかと思い、企画案を作成してみました。以下の選択肢からお気に入りのものを御選択の上、次号の御執筆や話題提供に備えて頂ければ幸甚に存じます。

### 1. 生電話「ちょっと聞いてよ、編集さん！」(対談企画)

希望者に電話をかけさせて頂き、(掲載可能な)内容を書き起こして記事にします。

### 2. 突撃、他県の晩御飯！(インタビュー企画)

何かのついでに編集担当がお邪魔しますので、何か御馳走して下さい。記事にします。

### 3. 大会の講演時間を延長サービス！(特典オプション)

御投稿頂いた会員の皆様から抽選で講演時間を 20 分間延長。大作発表が可能です。

### 4. 情報交換会後の 2 次会 (以降 5 次会まで) 同行サービス！(特典オプション)

御投稿頂いた会員の皆様の 2 次会に、編集担当がお付き合いします(但し会費制)。

(いずれの案も実現に向けて、役員に働きかけるかもしれないことをお約束いたします。)

皆様からの御投稿を心よりお待ちしております。

(編集担当 清水 健)

***** ニュースレターNo. 37 (2016年7月発行) 目次 *****			
＜巻頭言＞			
作物栽培現場の農業生産者への貢献を！	山本敦司	・・・	1
＜ニュース＞			
虫害担当となって	吉田昂樹	・・・	3
りんごの共同防除とハダニ	布山佳浩	・・・	4
「赤ちょうちんと温故知新」	大矢武志	・・・	5
とりあえずローテーション防除の完遂で いかがでしょうか	杉井信次	・・・	7
一律基準値では農薬散布はできなくなる？	畑中 猛	・・・	7
モンスーン入門	森下正彦 井上 誠	・・・	8
石川県での斑点米カメムシ類の発生状況と最近の取組み	植松 繁	・・・	12
日本のアブラムシアーリ共生系に新メンバー： モンクチビルテントウイシガメと共に 20年	金子修治	・・・	13
＜第21回農林害虫防除研究会（山梨大会）のご案内＞		・・・	15
＜お知らせ＞		・・・	15
＜第46回常任幹事会議事録（概要）＞		・・・	16
＜農林害虫防除研究会会則＞		・・・	19
＜農林害虫防除研究会名誉会員名簿＞		・・・	21
＜農林害虫防除研究会役員名簿＞		・・・	21
＜農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿＞		・・・	21
＜研究会への入会方法＞		・・・	22
＜会費納入のお願い＞		・・・	22
＜ニュースレターNo.38の原稿募集＞		・・・	22
＜編集後記＞		・・・	23
＜目次＞		・・・	24

＜著作権＞このニュースレターに掲載された記事の著作権は当研究会に帰属します